

『日本 26 聖人殉教記』

2015 年 01 月 18 日

カトリック作家の加賀乙彦氏が、新聞に「キリシタン殉教」について知る必要があると書いていた。私は恥ずかしながら、新聞、テレビを通じての知識くらいしかなかった。帰郷した時、ペトロ・岐部の資料館に案内され、感動した。キリシタン大名の大友宗麟の影響を受け、洗礼を受けたペトロ・岐部はマカオに追放される。日本人として初めて、アラビア砂漠を歩いてエルサレムに行き、その後ローマに入り、待望のイエズス会の司祭になる。キリシタン禁制の中、帰国し仙台で宣教するが、捕えられ江戸で拷問を受け殉教する。

「キリシタンの旅」で長崎に行った方から『日本 26 聖人殉教記』をお借りして読んだ。聞きしに勝る殉教史であった。著者は、来日した宣教師のルイス・フロイスで、1593 年に日本の状況をローマに書き送っている。病気がちであったため、急いで書いたそうだが、大部の報告書を懸命に書いている。訳者は、1978 年に帰化したスペイン人の司祭・結城了吾氏である。結城氏は、フロイスの書き方は歴史家の立場ではなく、自分の考えに固執し、神を味方につけたいようであると注解しているが、当時の雰囲気は十分に伝わってくる。小西行長、高山右近、ガラシア細川などの聞きなれた名前が出て来る。

豊臣秀吉の時代になり、秀吉は「キリシタン禁制」を打ち出した。秀吉は、宣教師たちの後に続いて、日本征服を目論むポルトガルの勢力が来ることを恐れたのではないかと想像できる。殉教史を読むと、幕府が一途なキリシタンを抑え込むのは困難であろうと想像できる。

京都で神父と修道者とイルマン（兄弟）たち 24 名が捕られ、まず耳を切り落とされる。そして、死刑にするため堺から長崎まで、1、2 月の寒い中 1 ヶ月ほどかかった苦行の道行きを強いられる。もちろん、見せしめのためである。途中、2 名が加わって 26 名になる。彼らは殉教することを喜び、みじんの動揺もなかった。殉教者たちは多くの手紙を書き残している。「謹んで神父様にこの手紙を差し上げます。この間太閤はイエズス会の神父及びイルマンを処刑するように命じたと聞いて、この幸せな時代に生まれ合わせた自分を幸せだと思えます。それは私に相応しくありませんが、神父及びイルマンと一緒に聖なる信仰のために死に、彼ら共々パライソ（天国）まで行くことができると思い、喜びで跳び上がらんばかりでした。」また、彼らは獄中で刑吏や囚人たちに主イエスの生涯を語り、感動を与えたという。パウロの獄中伝道そのままである。

長崎で十字架にかけられる。主イエスは十字架上で放置されたが、26 名の殉教者たちは槍で突かれて絶命している。10 ヶ月前に信仰に入った 12 歳の少年は十字架の上で「パライソ、パライソ、イエズス、マリア」と言い、人々を感嘆させた。16 歳の青年は十字架にかけられた時、懐に母親への手紙を入れていた。血まみれになった手紙には下記のように書かれていた。「もし主イエス・キリストから受けた数多くの御恵みを考え、それを認めれば救われます。現世ははかないものですから、パライソの永遠の幸せを失わぬように努めて下さいますように。人々からのどのような事に対しても忍耐し、大きな愛徳を持つようにしてください。」刑場にキリシタンたちが集まり、十字架で流された血を受けようと、また、殉教者たちの衣服を奪い合うように求めたという。

フロイスの報告は少し出来すぎではないかと思うが、殉教者たちは主イエスの十字架に倣い、毅然と死んでパライソに行くことに喜びを持ったことは確かである。彼らの初々しい一途な信仰はどこから来たのであろうか。世俗化した現代人が失った眩いばかりの信仰に心が洗われた。「信教の自由」は血によって勝ち取られたことも忘れてはいけない。